妖霊星　四

近藤ようこ

つれなのふりや
ふふふふふ
カタ…
ふふふ
すげなの顔や
あのような人がはたと落ちる……
ふふふ……

姫さま

少しはめしあがらないと
欲しくない

こんなにおやつれになって…

さても恋とは辛いものでございますね

恋?
だれが?

田楽の座の児を恋していらっしゃる
いいえ! そんなことは——

あたしはただ…
あの者に会って
顔を見たい
だけ…

ほほほっ
それを恋と
呼ぶのですよ

わからない

わたしは鏡に映すかわりに
身毒丸の中に
自分の影を見ているだけなのに
それが恋なら
世の人は皆
そうしているのだろうか

ここは知っている
子どもの時
来たことがある
チチチチチッ

はははッ

しゅっ
身毒丸が
死んでいる

もう
わかっている
わたしたちは
ふたりでひとりだ
チチ
チッ
え？

星

星…

おまえの婚儀が決まったぞ

え

隣の郡の長者の息子じゃ
よい縁ができました

わたしは聟などとりません……

女がひとりでいると魔物が憑く
世間でおまえをなんと噂しているか知っておるか
ギシ

……

それとも……
まさかないとは思うけれど
だれか思いを寄せる男がいるのですか

夢に現われる者がおります

先日お呼びになった田楽の――

たわけが!!
ガタ!

やはり
なにかに
憑かれて
おるわ!!
部屋に
閉じこめて
おけ!!

一歩も
外に
出すな!!

まあ
この人たちがわたしのことを
こんなに本気で考えるのは
きっと初めてだ

虫の声がやんだ

ドタドタドタ
バタバタ
ざわざわざわ

星が
星が
あれ恐ろしい

あ！

星？
カタ

なんじゃ
この星は
――
凶兆か
……
この世の
終わりの
ような
眺めじゃ
乙姫の心の
定まらぬ
のも…
この
星の
せいでは
……

もう
鏡など
いらない

わたしは
身毒丸を追った

つづく（次回は9月号に掲載）